

村上農園 園主

村上 怜右さん(赤池)



ブラジルで27年過ごし、経営者から農業の道へ。とよみつひめの甘さは村上さんの思いが実を結んだものです。



通 信会社に勤めていた村上さんは44年前、海外駐在員に抜てきされ、家族でブラジルのサンパウロへと渡りました。11年間働いたのち、現地で起業。ブラジルの通信インフラ整備に大きく貢献しました。59歳のとき、起業した会社を手放し、妻の生まれ育った赤池でとよみつひめの栽培を決意。「なんでもやればできる。慣れない農業もやればできた」。試行錯誤を繰り返しながら始めた栽培も今年で17年目。村上さんのとよみつひめは、その高糖度と高品質が評判を呼び、ふるさと納税の返礼品で全国ランキングの上位を獲得。「待ってくれている人のためにも頑張りたい」と76歳を過ぎた今も決して努力を惜しみません。

やればできる、
やらないなら
できない。



異国文化にもまれながらもブラジルで生き抜いた村上さん(写真中央)。



村上農園 (福智町市場)
約500㎡の県内最大規模のビニールハウスを有し、農業の使用を極力抑えた丁寧な栽培で高品質ないちじくを生産。5月中旬から9月にかけて収穫し、農協や農園内で販売しています。

どんなときも
明るく、楽しく
元気よく!



納品前の品質チェックは入念に大井さんが行っています。

楽心堂本舗 副社長

大井 知子さん(金田)



テレビ番組の「情熱大陸」が原動力と語る大井さん。落雁に情熱を注ぐ新たな人生を踏み出しました。



「夢 は自分の道に情熱を注ぎながら第一線で活躍し、人に勇気を与える存在になること」。東京でライターとして活動する傍ら、事務員として働いていた大井さんは、30代前半のとき自分の人生を考え直し、母・哲子さんが始めた家業を継承することを決断。会社経営などゼロから学ぶ日々は、今までで一番辛い時期だったと振り返ります。「苦しみの中にも喜びを見出すようにしています。地域貢献できる会社、田川を盛り上げていく会社、地元で雇用を生み出す会社、福智町を代表するような会社になるのが今の目標です」と大井さん。仏様への御供物を形作るため、自らの心も映すように誠実な手仕事を心がけています。



楽心堂本舗 (福智町金田)
大井さんの母・哲子さんが平成18年に開業し、弟・忠賢さんが株式会社として設立。福智町を拠点に、落雁を用いたお供物を制作・販売。多彩な色と技で表現されたお供物は評判を呼び、全国へと販路を広げ、急成長しています。

平成筑豊鉄道 社長

河合 賢一さん



「乗って残そうへいちく」。復興に向けてちくまるグッズPR販売も展開。



東 京大学を中退後、大分県庁に入庁。ツーリズム会社社長やバス会社取締役で手腕を振った河合社長。平成筑豊鉄道の社長公募を知り「幼い頃育った筑豊の活性化を進め、自分の手で経営改善できれば」と新たな一歩を踏み出します。就任時には「ひと駅ごとに宝を掘り起こし、観光につなげたい」と抱負を語り、時間があるときは各駅周辺を歩き、宝探しをする河合社長。「実際に歩くことで見えてくるものがある。一駅ひと駅個性があり、地元の人に愛されている。発見したことを発信していきたい」と目を輝かせました。「沿線で暮らす人々によりよいサービスを提供し、暮らしの役に立ちたい」と未来を見据え夢を追い続けています。

「何事も
めげずにやる」
それが一番。



HISの社長からの助言を胸に、平成筑豊鉄道の再建を誓った河合社長。



平成筑豊鉄道 (本社:福智町)
旧国鉄時代から含めて125年間、地域と人を支え続けた鉄道。石炭をはじめとした輸送面でも力を発揮しました。沿線の人口減少に伴い乗客は減る一方ですが、存続に向け新たな挑戦を始めています。(昭和49年撮影/新具重信氏)



人生の分岐点と
それぞれが歩み続ける
一身二生



伊能忠敬のように何歳からでも新しいことにチャレンジできる時代が到来しています。人生百年時代と言われる昨今、新たな道へと進み、今なお挑戦し続けている人たちが—— 人生の途中で一念発起し、次のステージへと歩みを進める福智の人々の生き様に迫ります。